

H30.2.19 植え付け～主枝候補枝の育成～



H30.6.19 摘しん
2 mまで伸長



H30.7.11



地際から分岐部
まで発生する脇
芽は葉を1～2
枚残して摘しん
します。



H30.8.8



H30.9.7



H30.10.11

伸ばした枝の状態を確認して、緑枝が
充実して茶褐色に木化した部分まで切
り詰めます。

令和元年度新品種・新技術の確立支援事業
南魚沼農業普及センター実証成績より

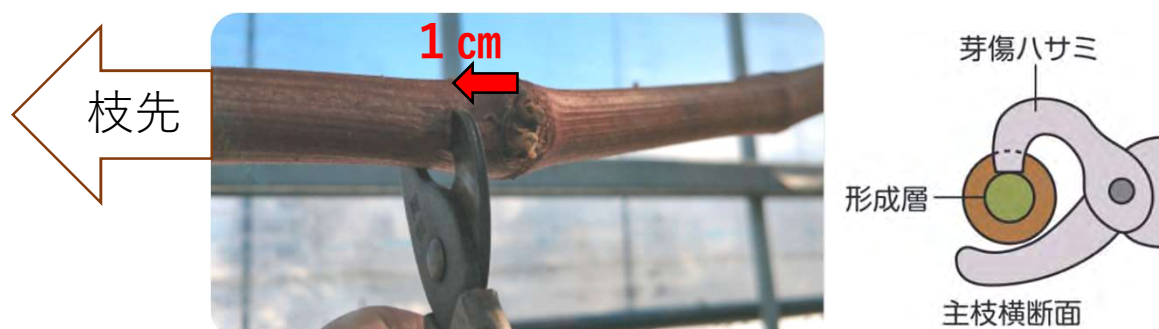
(2) 2年目の管理

ア 芽傷処理で枝を均等に発生させる

主枝上に、房をつける枝（結果枝）を均等に配置できるようにするため、育成2年目の主枝には必ず芽傷処理を行います。

処理時期は2月中が目安ですが、早すぎると枝が枯れ込む場合がありますし、遅いとぶどうの樹液がしみ出して芽が腐敗する場合があります。

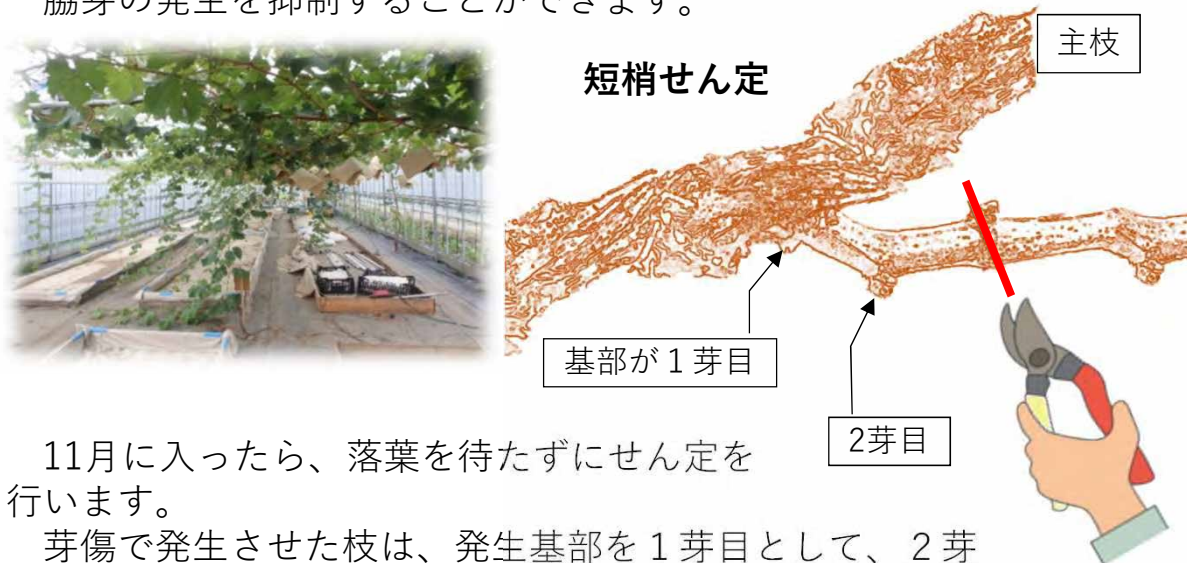
処理方法は、発芽させたい芽の先1cm程度のところを木質部に届く深さまで切り込みを入れます。専用の芽傷ハサミが市販されていますので利用するとよいでしょう。



イ 植栽レイアウトでデザインした樹形の完成

1年目の施肥とかん水方法を継続して、目標とした主枝の長さまで枝を育成します。目標の長さまで伸びたらそこで摘しんします。

芽傷をつけて発生させた新梢も旺盛な生育をします。となりで並行に育成している主枝から発生した新梢と交差して混み合う場合は、摘しんを控え、棚下に新梢先端を垂らすこと（写真左下）で不要な脇芽の発生を抑制することができます。



11月に入ったら、落葉を待たずにせん定を行います。

芽傷で発生させた枝は、発生基部を1芽目として、2芽だけ残してその先の節で切り詰めます。（上図）

2年目に延長した主枝は、1年目と同様2月に芽傷処理を行って、結果枝を均等に発生させます。

5.結実確保～種なし処理～

(1) 種なし処理のタイミング

植物成長調節剤を利用して種なし処理をすることで、安定した生産が可能となります。遺伝的に種を作れない品種（ナガノパープルやBKシードレス）もありますが、ほとんどの品種は無処理であれば種を作るため、タイミングよく処理をする必要があります。

処理タイミングは品種ごとに異なりますが、本冊で冒頭に紹介した3品種であれば共通の手法で処理することが可能です。

(2) 基本的な種なし処理の手順

シャインマスカット、クイーンニーナ、グロースクローネであればそれぞれの花が満開になってから3日後までに1回目の種なし処理を行うことになります。

1回目の処理は文字通り、種をなくす（作らせない）ための処理で、遅れるほど種が混入する可能性が高くなってしまいます。

種がないぶどうの果粒は、そのままでは食べられるような大きさまで肥大できないため、満開後10日から15日までの間に2回目の処理を行います。

基本的な種なし処理自体はこの2回の処理で完了しますが、実際には一斉に咲く開花期間に作業が遅れず完了できるよう、開花ステージに合わせた管理作業を進める必要があります。

種なし処理に使用する薬剤と使用基準（令和3年3月現在）

品 種	処理回数	成長調整薬剤名	使用目的	使用濃度	使用時期	使用方法
シャインマスカット （欧州系2倍体品種）	1回目	ジベレリン	無種子化	25ppm	満開時～満開3日後	花房浸漬
		フルメット液剤	着粒安定	2～5ppm		
	2回目	ジベレリン	果粒肥大促進	25ppm	満開10～15日後	果房浸漬
クイーンニーナ グロースクローネ （巨峰系4倍体品種）	1回目	ジベレリン	無種子化	12.5～25ppm	満開時～満開3日後	花房浸漬
		フルメット液剤	着粒安定	2～5ppm		
	2回目	ジベレリン	果粒肥大促進	25ppm	満開10～15日後	果房浸漬

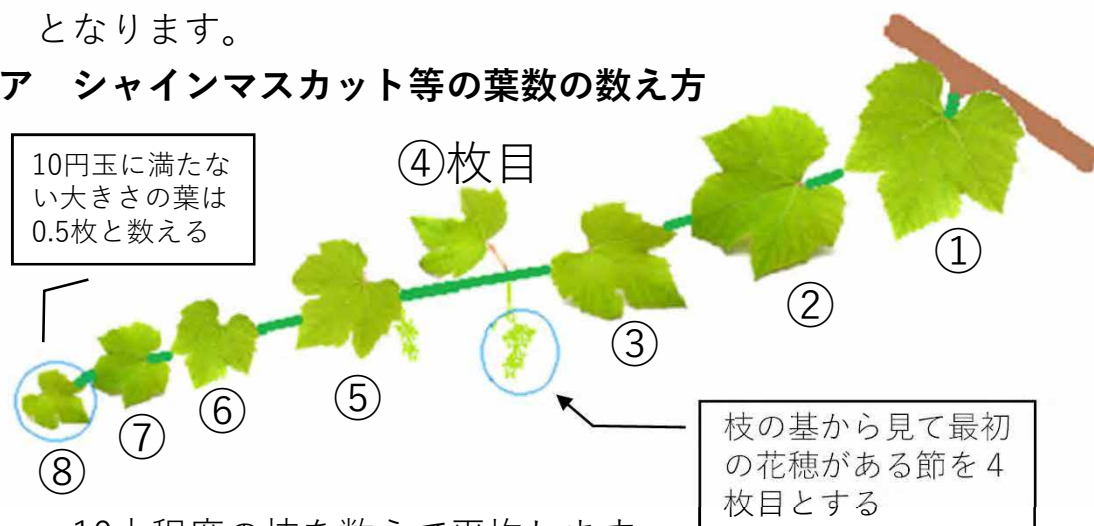
【重要】必ず薬剤の使用前に登録内容、安全使用基準、使用上の注意点を確認してください。

(3) 葉の枚数の増え方で満開期を予想する

種なし処理を行う時期をあらかじめ予想できれば、効率の良い作業が可能となり、より確実に種の混入を減らすことが可能です。

ハウスの種類やサイズ、立地条件、地力や樹の栄養状態によって生育スピードはそれぞれ異なります。自分が栽培している樹の生育スピードを的確に把握することが、種なし栽培を成功させる第一歩となります。

ア シャインマスカット等の葉数の数え方



10本程度の枝を数えて平均します。

ハウス栽培では2.5日程度で葉1枚が増加、露地栽培では3日で1枚増加するのが目安となる生育スピードです。

イ 葉数と種なし作業の段取り例（ハウス栽培）

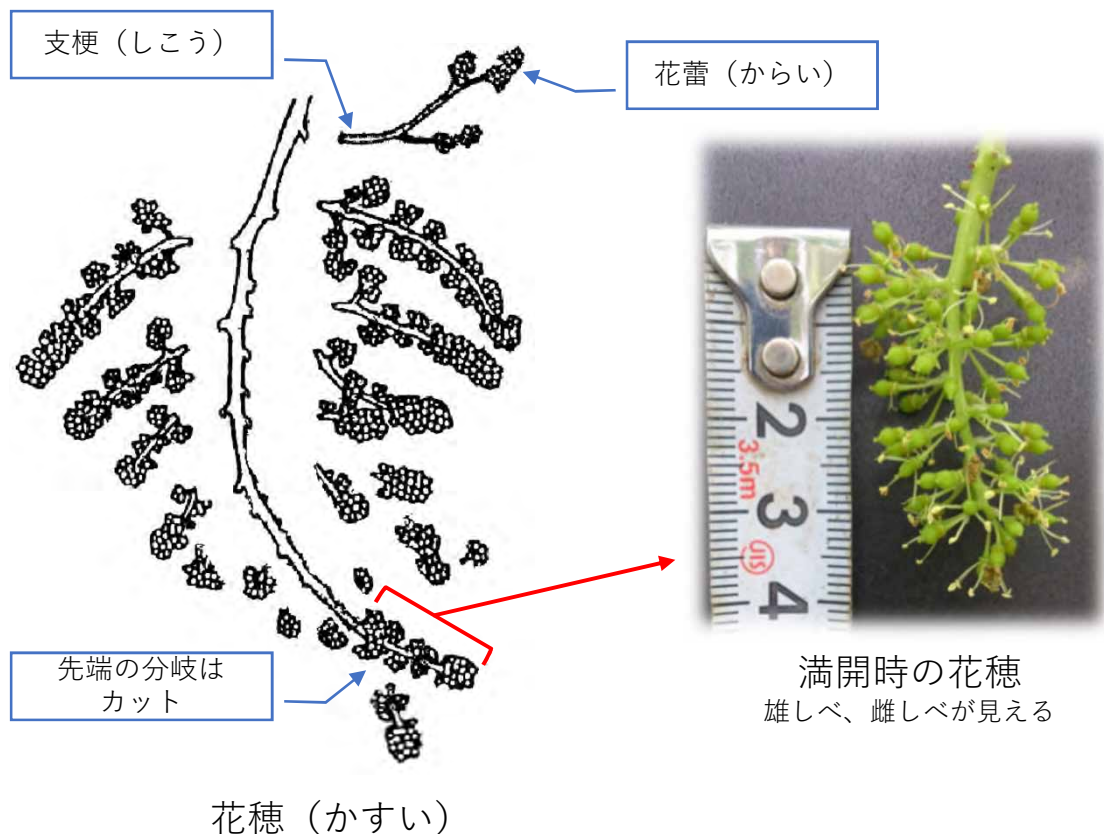
葉数	満開前日数	生育ステージ・作業内容	目的
9	12～13日	アグレプト液剤散布または花房浸漬	種なし成功率向上
10	10日	開花始め：花穂の上段から開花が始まる	
11	7～8日	新梢誘引、1結果枝1花穂に整理	作業効率化
12	5日	「房切り」開始：花穂の成形作業	大房防止
13	2～3日		
14	0日満開	種なし処理（ジベレリン処理開始）	種なし化
15	満開後2～3日	満開3日後まで	

注）満開前日数は2.5日で葉数1枚増加を前提に試算しています。

(4) 房切り作業〔花穂整形〕

1房につける果粒の数は、仕上げ段階で30粒なので、花をすべて咲かせる必要はありませんし、結局落としてしまう果粒まで無駄に薬液を漬して処理する手間ももったいありません。

そのため、種なし処理をする前に、花穂の無駄な部分を整理して作業の効率化を図ります。10アール主枝長200mに10cm間隔で着房させれば2,000房です。満開時から3日後までに処理を完了するため事前の房切り（花穂整形）作業の重要性が想像できると思います。



葉数が12枚を数えたら、花穂の末端3cm位を残して、上段の花蕾をすべて切り落とします。花穂も枝の伸長、葉数の増加と同様、日々成長して長く伸びていきます。

房切りのポイントは、右上写真のとおり「**満開時に3.5cm**」の花蕾が残してあることなので、房切り作業が早すぎて、作業直後は3.5cmだったものが満開時に5cmまで伸びているようなら、再度花穂整形をしなければなりません。

花穂をコンパクトに仕上げることは、このあとの摘粒作業の効率化に大きく影響します。

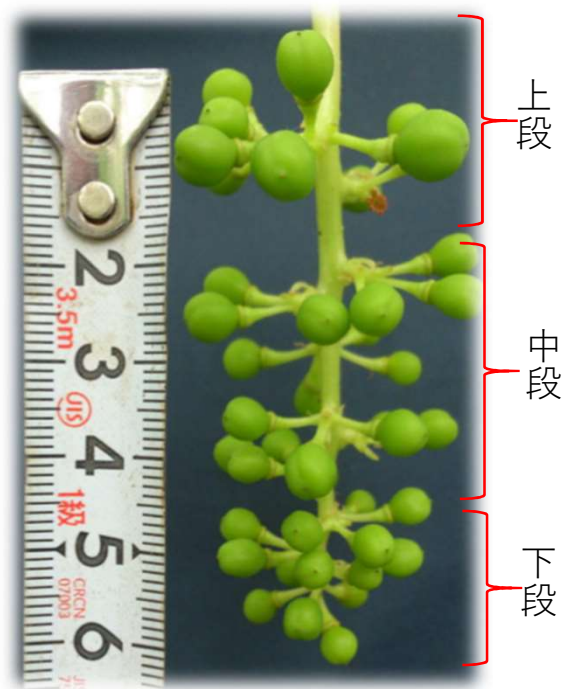
(5) 摘 粒

2回目のジベレリン処理を行うと、果粒の肥大が日に日に進み、やがて果粒同士が密着してしまいます。必要以上の果粒を残すと肥大に伴って実割れ（裂果）、腐敗を招くので、30粒程度の着粒数に仕上げる必要があります。これが摘粒作業です。

慣れれば素手で摘粒ができる方もいらっしゃいますが、慣れないうちは摘粒ハサミで行うので、果粒肥大が進む2回目のジベレリン処理前にできるだけ摘粒を終わらせてしまいます。

【摘粒の手順】

- ① 2回目処理時の軸長を6～7cmに調整するため上段の支梗を落として果軸の長さを調整する。
- ② 下段の着粒が悪いものや、果軸の曲がりが極端なものは、できるだけ着粒の良い支梗がそろっている曲がりの少ない部分を利用する。
- ③ 上段の支梗を使うほど、支梗の横伸びで房型が悪くなるので、適宜切りそろえ、房の上部が大きく張りすぎないように注意する。
- ④ 支梗の数は12～13段程度とする。
- ⑤ 支梗・果軸が短く、果粒が密着した房となるので、内側に入り込む果粒は確実に取除く。
- ⑥ **上段は**1支梗3～4粒で、**横・上向きを残す**。
- ⑦ **中段は**1支梗3粒程度で**横向きのみを残す**。
- ⑧ **下段は**1支梗2粒で、**横・下向きを残す**。



残す果粒の向きがポイント

6月末にまでは仕上げ摘粒を終わらせて、カサと袋かけを行います。